戦争を知らない世代へ⑧新潟編

長岡空襲の記録

戦争を知らない世代へ ⑧ 新潟編

長岡空襲の記録

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑧
長岡空襲の記録

昭和50年7月20日　初版第1刷発行

編　者　創価学会青年部反戦出版委員会
発行者　山崎善智
発行所　株式会社　第三文明社
郵便番号　101 東京都千代田区猿楽町2-5-4
電話　東京(294)8731(代)　振替口座　東京117823
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社　星共社

0036—7008—4438

はじめに

戦争――何の関わりもない庶民の尊い生命を無差別に奪い、豊かな郷土を焦土に変え、悲惨と不幸をまき散らす。まさに魔の所業と断ぜざるを得ない。

第二次世界大戦の末期、日本の主要都市は相次ぐ空襲で焦土と化していった。そうしたなかで、日本海沿岸地帯は、特別の空襲に遭うこともなく平穏な日々を送っていた。それだけに、昭和二十年八月一日夜、長岡市を突然襲った焼夷弾の嵐は、一瞬にして阿鼻叫喚の地獄絵図を現出した。

あれから三十年。空襲の禍根はいまだに続いている。瞬時にして千数百の死者を出しただけでなく、生活の支柱を失った人々の暮しの中に、いまなお戦争の傷跡が、奥深く刻み込まれている。

今、社会には戦争を知らない世代が増え、無惨な戦争が美化されつつある風潮すら感じられる。一部の利権者たちによって、庶民が再び狂気の体験を積み重ねることを断じて許すことはできない。

私たち創価学会青年部は、昭和四十九年一月二十日第二十一回青年部総会で、信仰者としての社会的信念に基き「生存の権利を守る青年部アピール」を採択。以後、反戦平和運動を積極的に展開してきた。この反戦出版活動も、昭和四十九年八月に日本海沿岸唯一の被爆地長岡市で開いた反戦平和集会の席上、大会宣言の一項として被災三十周年（注昭和五十年）までに出版することを謳い、地道に進めてきたものである。

ささやかな体験集ではあるが、一人一人の発言の中に「戦争許すまじ」の怒りと「平和」への叫びが込められている。願わくば、この平和を希求する生命のほとばしりに感じ、一人でも多くの人が心の中に「平和への砦」を構築されんことを祈るものである。そして、「反戦・平和」の意識啓蒙の波動が、社会の隅々まで浸透し、連帯の輪が広がっていくことを期待する。

取材活動、編集活動に貴重な時間をさき、献身的に働いてくださった新潟県反戦出版委員会のメンバー、中央反戦出版委員会のメンバーに、心から感謝の意を表するとともに、更なる精進を決意するものである。

昭和五十年七月

創価学会青年部

新潟県青年部長　高田　茂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目　次

はじめに　1
思い出すのも嫌なあの頃……柳　一男　9
悪夢の一夜が明ける……早川美津枝　14
市街地の八割が火の海……加藤　サダ　20
二度も焼け出されて……鈴木　キノ　25
焼死した父への鎮魂歌……田中イサミ　29
父と見た燃える街……家老　太清　33
爆心地を逃げ惑う……西片　芳子　37
役に立たなかった防空訓練……丸田　ヒデ　41
偶然に空襲を免れて……平野　はな　47
信じていた日本の勝利……韮沢チエ子　51
一か月で灰になった新居……浅見　スマ　56
悲しかった疎開生活……山口　玲子　60
地獄の焼け跡……平井チエ子　63
お前だけでも生きてくれ!!……鈴木　久子　70

忘れられない野宿生活……吉田　博　75
空し！「戦争に勝つまでは」……竹内　兵三　78
今なお消えぬ青春の傷痕……田中　愛子　81
肉親を奪った戦争……溝口　スミ　87
我が忘れじの記……綿貫　ヒロ　90
軍需工場に勤めて……石田　悦子　94
幼くして知った戦争の悲惨……渡辺　功　97
見るも無残な光景……永井　貞次　99
父母と弟妹を亡くした一夜……安藤　恭三　103
〝逃げる訓練〟をすべきであった……堀　一夫　110
腰が抜けてしまって……松谷　シン　114
一晩中、池にいた私……金子　イツ　119
私は逃げずに助かった……佐藤　タツ　122
焼け跡に怨みを込めて……高坂　ソヨ　124
国破れて山河あり……長部　竜夫　129
戦争には勝利などありません……滝村　ヒテ　133

十六歳、恐怖の思い出……恩田　春雄　137
逃げてしまった警防団本部……岡地ミヨシ　141
B29に土下座した五歳の娘……伊佐きよし　145
焼夷弾に殺戮された妹……飯利　雪江　152
私に残った戦争の傷痕……佐藤みよし　156
もう、本当に沢山だ！……林　リツ　159
捕虜の住む町は無傷……石橋　イネ　162
水の中に全身を沈めて……今井　正子　165
火との戦い……小林　常作　169
雨の降るような音……広川マツイ　173
焼け残った我家……今井　政男　175
予期せぬ罹災……高橋よし子　181
小学生の時みた空襲……堀川　勝己　184
戦争一色の人生……高橋　智恵　187
子供を見捨てずに……佐藤　吉雄　192
焼夷弾の直撃……矢尾板ユリ　195

母ちゃんはどこへ行ったの……遠藤美代子 199
妻の悲鳴……高野　謙次 203
お母ちゃんをゆるして……渡辺亀次郎 209
国鉄職員として……深井　慶吉 123
編集後記……219

長岡空襲の記録

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

思い出すのも嫌なあの頃

柳一男（58歳）

私は昭和二十年八月一日、長岡で空襲の惨禍にあった者の一人ですが、あの戦災の記憶だけは正直なところあまり思い出したくはありません。

今となっても、当時の話が出る度に不機嫌になってしまいます。あの頃私は、一男一女の父でした。前々より自分の家が欲しくて一生懸命で、昼夜の別なく働き続けの毎日でした。そして、やっとのこと家が我が物となったその時、空襲です。それまでの長かった努力にひきかえ、一瞬のうちに灰と化した私の家。ですから被災後の惨めな生活を思い起こすとただただ腹立たしくなるばかりですが、私達の体験を再び、次の世代の人達が繰り返すことのないよう少しでも戦争の悲惨を知ってほしいと考え、ここに書いてみる気になりました。

あの夜、私は九時まで残業し、家で遅い夕食をとっていた九時半頃、警戒警報のサイレンが鳴り響きました。しかし、またかと思ってさほど気にせずにいると、間もなく焼夷弾を落とすザァー、ザァーという夕立ちのような音とともに大きな爆発音が聞こえました。慌てて窓を開けると

驚いたことに、長岡市の中心部あたりは既に真赤な火の海となっていたのです。「大変だぞ！早く逃げろ！」と私は家族に言うと身仕度にかかりました。その時、我が家の屋根に焼夷弾が一発ズドンと凄まじい音をたてて落下したのです。壁はザラザラ崩れ落ち、家は潰れんばかりに激しく揺れました。

家内は下の子を負ぶっておむつの包みを持っただけ。私は長男を連れて外に飛び出すのがやっとでした。外に出たもののあたり一面は煙で方角の見当がつかず、どちらへ行けば安全であるのか一瞬判断に迷いましたが、まごまごしていれば焼け死ぬだけと直感し、暗い方めがけて懸命に走りました。やっとの思いで福島江の土手に辿り着いたものの周囲は火の海です。ここにいては危ない、山の方へ行こうとまた走りました。

どのくらい逃げたのか、気づくと私達は川崎町に着いていました。川崎は市街地からかなり離れていたのでそれ程被害を受けてはいませんでした。恐らく攻撃の目標ではなかったのでしょう。ほっと一息して、それからすぐ川崎の親戚の家へ向かったのですが、幸いにもここは災害を免れていましたので、ひとまずそこで子供達を休ませました。家内の父も来ており、「良かった、良かった」と互いの無事を喜び合いました。長岡を火の海にしたB29が遠くへ去り、私達は胸をなでおろしました。

そして、夜が白々と明けようとする午前三時過ぎ、私はこの川崎から近い長町にある家内の実

家へ行ってみました。一人で自転車で出かけると、そこは半焼程度でしたので、焼け残りの荷物を自転車に乗せられるだけ乗せて川崎の家へ戻り、それを置き終わると今度は、気がかりであった自分の家を見に行ったのです。夜が明けても街はまだ燃え続け、中心部は全くの火の海でした。やはり、私の家はすっかり燃え落ち、役立つ物は何一つありませんでした。予想はしていたものの残念で堪らず、がっかりしたまま暫く立ちつくしていました。

午後になると〝炊き出し〟が出るというので、川崎から取りに出向いたのですが、前の晩から何も食べず、一睡もしていないために途中、福島江まで来た時にはさすがに疲労が出て、土手の桜の木陰に座りこみ休んでしまいました。一休みした後、水を口に含んで何気なくあたりを見回すと、夏の強い日差しに照らされた全焼の街が福島江から長生橋まで一直線に見通せました。それを私は、麻薬による幻覚状態にある人間のようにただ茫然と眺めていました。

その時、近くでビリビリと布を裂く音がしたのでそちらを見ると、生後二、三ヶ月の赤子を抱いた若い母親が自分のスカートを引き裂いているのです。私は驚いて「どうしたのですか」と尋ねると、彼女は下着一枚の姿で子供に目をやり「夕べから一度もおむつを替えてないので、これをおむつにと思って……」と答えるのです。「御主人は？」「兵隊です」、「実家は？」「高田です」私の質問に彼女は小さな声で答えました。私はそうと知ったところで、どうすることもできず黙って見ているだけでした。彼女は、長岡には頼る所が無いのでこれから高田まで約八十キロの道

を歩いて帰るというのです。下着だけで、それも裸足のこの若い母親が子供を抱いてはたして高田まで辿り着けるかどうか心配でなりませんでしたが、私とて自分のことで精一杯、一言「気をつけて」と言って別れましたが、彼女が気の毒でなりませんでした。

我に返った私は〝炊き出し〟を思い出して自転車を走らせました。家では妻子がひたすら待っています。しかし、その炊き出しも雀の涙ほどのものでした。腹を減らした子供達はもっと食べ物を欲しがります。私はとうとう生まれて初めての泥棒をやってしまいました。夜の闇にまぎれ、近所の畑で茄子や胡瓜を必死の思いでかっぱらったのです。明日の食物を確保するために。ところが、家へ持ち帰って食べようとすると、油臭くてとても食べられはしません。それは空襲で撒かれた油だったのです。これでその日の食物は皆無です。私は仕方なく親戚からこわれたザルを借り、近くの川で小魚を漁って飢えを凌いだのです。

空襲から三日目の晩、市から酒と煙草の配給がありました。ほんの僅かでしたが私にとっては喉から手の出る程の嗜好品です。しかし、そのまま手を着けずに農家へ持って行き、米と交換しました。まさに食べることのみに必死であった毎日でした。次の日、当時私が旋盤工として働いていた工場へ行ってみると、工場は見る影もなく焼けており、先日まで私が使っていた機械は無惨に焼けただれていました。当然、工場は解散ということになり、私は家のみならず、職をも失うはめになってしまった訳です。

被災後一週間が過ぎると漸く混乱も収まり落ちついてきましたが、依然として食糧を捜がし回らねばならない毎日でした。そんな時、八月十五日の終戦の報を聞いたのです。それを耳にした時、本当にこのまま死んでしまうのではないかと思う程がっかりして力が抜けてしまいました。戦争に負け、家も職も失った私達を待ちうけていたのは惨めな生活だけでした。

夫を奪い取り、沢山の女性を不幸にしてきた戦争、多くの老人や子供を苦しめてきた戦争、現在の平和な時にこそ、戦争の残酷さを肌で知った者が中心となって反戦を訴え続けていかなければならないと思います。

悪夢の一夜が明ける

早川美津枝（43歳）

忘れようとしても忘れることのできない恐怖の一頁を書き綴ろう……。

当時　女学校一年生の私の
楽しい筈の学生生活は　破れ
夢も希望もはかなく消えてしまった。
連日連夜の空襲警報発令の
けたたましいサイレンの音に
脅えながら防空壕へ待避し
淋しさと心細さに耐え
不安な日々の幾夜を過ごした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c